

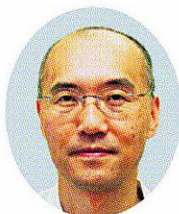
子宮体がんでのリンパ節切除

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

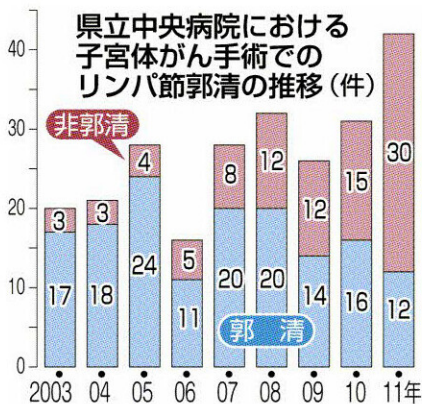
《 25 》



池上 淳
婦人科科長

子宮体がんの手術後、患者を苦しめるのが下肢のリンパ浮腫。足がばんばんに腫れ、生活の質（QOL）を著しく低下させる。これは手術で骨盤内のリンパ節を切除する「郭清」を行うことで起こる副作用だが、近年、子宮体がんのタイプによっては、リンパ節郭清をしなくても治りがいいことが、県立中央病院の治療実績から分かってきた。婦人科科長の池上淳医師によると、2002年から11年までに同病院で子宮の摘出手術を受けた、初期の子宮体がん患者210人について、リンパ節郭清を行った人と行わ

浮腫のリスク、手術法見直し



なかった人の再発率を調べたところ、5年間の再発率は郭清の有無による差がなかった。池上医師は「リンパ節郭清を行うと手術時間が約2倍かかり、傷口は大きく輸血も増える。リンパ浮腫の治療は難しく、再発率が変わらなければ、郭清をしないに越したことはない」と話す。

このため、県立中央病院では昨年からリンパ節郭清を行わない手術方法を積極的に選択。03年には子宮体がん手術のうちリンパ節郭清をしない手術は15%だったが、10年に

は約50%、11年には70%以上を占める。

ただ、がんのタイプによっては郭清が必要だ。郭清を省略できるのは、子宮体がんの中でも比較的進行が遅いと考えられる高分化型類内膜腺がん。さらに、子宮体部の外側にある筋層にがん細胞が入り込んだ程度が浅い症例に限っている。

進行が早い低分化型類内膜腺がんや漿液性腺がんなどは依然としてリンパ節の郭清が必要だが、子宮体がん患者の約9割が「高分化型」という。郭清をしないことで、多くの患者がリンパ浮腫を患う心配がなくなる。

池上医師は「食生活の欧米化や、少子化といった女性のライフスタイルの変化によって子宮体がんは増加している。その中で、少しでも患者さんの負担を減らし、QOL向上に努めたい」と話している。

Ⅱ次回は30日に掲載します